子どもの造形的発想について(1)

林　健造

子どもの造形教育

みんちゃんは五才の男の子である。彼の絵は最近までほとんどスクリッブル（錯画）の形で、よくことばでは表現するが、形には表われてこない。そして常にこういうのである。「ボクはかきかたしらないから描けないゃ。」

この「かけないからかかない。」ということばのでてくるところに、実はこの子の問題がかくされているのであるが、それはそれとして、先日始めて形をなした絵を描いた。描く前に、いつになく彼は潑剌としていて、

「ボク今日は東北本線、汽車、トンネル通っていくの。」といっていた。よほど数日前にいった宇都宮行の汽車に興味があったらしい。さて描く段になると、やはりいつものせりふである。そこでいろいろ私と話合いをしたのであるが、やがて力づよく汽車を描きだした。でき上りというので「鉄橋は？」ときいてみると、確乎として「こんどは鉄橋かくの。」という。かくて二枚目は鉄橋を何のちゅうちょもなく描き上げたのであるが、話をきいてみると、想像通り、その鉄橋を先の絵の汽車が走っていくのであるという。

ここに子どもの絵のおもしろさがある。視覚的には一つであるべきモチーフを平気で二分して不合理に感じていない。子どもの絵は視覚的レアリズムでないといわれているのもうなずけるゆえ

んである。子どもは汽車、鉄橋というつながりを体感として感得しているので、一枚の絵にいれなくともよいのである。おとなは、簡単に一枚の絵の中に遠近法や重置の技法をしらないためにかけないのだと考えやすいが、それだけでは解決できない。

この、汽車は汽車で、鉄橋は鉄橋で分けてかいて、合わせて一枚という考え方は、子ども独特の表現であり、子どもの発想である。

このような絵は、子どもの表現の発想を、よくしっていないと、理解することはなかなか容易でない。

以上のような、子ども独自の世界から生まれる造形的な発想というものは、絵だけでなくて、「製作」の面でもより多くの例をみることができよう。しかも造形という問題を考えるときに、この発想ということは、たいへん重大な意義と、興味ある問題をもっているように思われる。

ただ、子どもの造形的な発想といえども、絵の場合と、製作の場合というそれぞれの違いだけではなっとくのできないことがある。例えば、ねんどで長い長い蛇を作ったりしていることと、空箱で自動車を作ったりしているときの発想は、おなじ製作であっても、ねんどの場合は、非常に絵に近いはたらきであるし、自動車の場合は、窓をあくように工夫してみたり、車をつけて何とか走らせてみようと考えたりして、本質的にその出どころが違うようである。

したがって、子どもの造形的な発想を言う場合に、まず近頃とりあげられている新しい造形教育の考え方について述べておきたいと思う。

☆ 二つの分け方

左の表は、「造形」を、それぞれの活動や、表現の形式で、四つに分けて考えたものである。

	平面的	立体的
表現の心	絵	彫刻
表現の機能	デザイン	工芸

今まで使われてきた、幼稚園の「絵画製作」小学校の「図画工作」は、もちろん絵画と製作を、あるいは図画と工作の二本立てのとりあつかいをするという意味ではないが、二つのものを一本にした考え方であることは否めない。この場合の考え方は、いわゆる平面的なしごととしての絵や図案を「絵画」とか「図画」とよんでいたし、立体的なしごとの方を「製作」「工作」というとらえ方をしており、つまり表のタテの分け方をとっていたものである。

ところで前にも述べたように、絵をかくことと、粘土でものを作るといったものは、いかに自分の感動を表現するかという尺度

でみれば同じことではないか、という見方が成立つわけである。そのように尺度を「心の表現（心象表現）」と「機能（はたらき）表現」というヨコの分け方でみていくと、心の表現として「絵と彫刻」、機能の表現として「図案（デザイン）・工芸」が入ることになる。

どうもこのヨコ分けの方が、造形の本質的なものをよく理解しやすいようであり、しかも合理性があるように思われる。

こんどの教育課程の改訂にともなって、小学校の学習指導要領が新たに出されたが、この中の「図画工作」の考え方はこのヨコ分けの考え方で通されている。

☆ 心の表現

ある学年ＰＴＡ懇談会のときの話であるが、話が進むうちに、国語の教師が「場に応じた話合い」の必要性について話された。「先日もある子どもが、仕事をしている私の耳のそばで〝先生テレビ買ったよォー〟と大声でいうので、〝先生はお耳があるのですよ〟といった」という例話を挙げて、家庭でも場に応じた発声の仕方に努めてほしいというお話であった。

このときに「さあ、こまったことになりました。実は図工科では、そのような時にはできるだけ大声で〝テレビ買ったよォー〟と言えるような子どもを育てようとしているのですが。」と図工の教師はいうのである。

この二つの対立した話は、それぞれ教科の主要の目標を表わしていておもしろい。なるほど場に応じた発声の仕方という躾も大切に違いない。しかし、このテレビの例が悪かったのであろう。事実、おとなでもテレビを買ったときはうれしいに違いない。まして子どもの場合、その感動は大きい。買った翌朝、思わず大好きな先生のところにとんでいって大声で報告した気持が、本当によくわかるような気がする。この場合、この感動をおさえて、場に応じた発声でごく小さい、しかも低音で話したら何だか「申しわけございません。」といっているみたいなそぐわない感情になるであろう。

話はややそれるが、こんな場合に「そう、よかったね。」と一しょになって心から喜んでやれるような教師になりたいものである。

さて、このように自分の心の感動を思いきってぶちまけていくところに、実は、絵画製作や図画工作という教科の主要なねらいがある。とくに、幼稚園や小学校低学年では、最も大きな領域を占めているものであり、自由に、のびのびとした感動の表現を通すことによって、はじめて情緒を安定させ、また自己表現に誇り

をもつようになるのである。

この意味からは、けんかをした直後の子どもが、赤色などでぐるぐるとなぐり描きをした絵と、おまつりなどを描いた絵とは心の表現という尺度からは同価値であるといえるであろう。

普通に美術といわれてきた分野は、この心の表現を主にした世界である。

☆ 機能の表現

心のまま、感動のおもむくままということが大切であるといったところで、それでは困る造形の分野がある。例えば、感動のままに作った建築などというものには、不安で入れるものではない。同様に、椅子などでも、ただ心のままに美しい椅子を作ってもらっても、かければぺしゃんこになるような椅子であれば、何の用もなさない。家には家の、椅子には椅子の機能というものがある。

この機能を考える仕事は、心の表現よりは、むしろ頭と手とのかみあいでできた表現であり、条件下の合理的な世界である。

このような活動は、何も家や椅子のような立体的なしごとに限ったことではなく、平面的な仕事の中でも、例えばポスターなどは、あることがらを多くの人に伝達するという機能があるわけで、運動会のポスターが、先のなぐり描きで何をかいたのかがわからないのでは、ポスターという用をなさない。

幼稚園の子どもの活動の中にも、このような機能や用を含んだものがたくさんある。例えば、子どもたちの好んでする〝おままごと遊び〟のお菓子やさんの看板でも、おままごとの道具でも、機能や用があり、これが生かされないことには、遊びも十分に楽しめないということになる。

ただこの場合、間違えられると困るのは、用といっても、あくまでも子どもの用ということでなければならないことである。

以上のように、心の表現と機能の表現との両面、それに団子の串のような役割を果す構成練習といったものを含めた一つの構造を考えてみると、これは美術といったことばではむしろ不適当で、造形とか造形教育といった方が即応している。

ここでいう子どもの造形教育も、このような考え方に立っているものである。

次号は、子どもの発想について述べよう。

* * * *